

令和3年度

NO.71

かみがえ



6年 高津 琴羽 「争いを無くすために」

上長飯小学校

【はじめに】

今年も七十一冊目となる学校文集を発行することができました。第一号は、今から六十二年前の昭和三十四年に発行されています。その当時は、文集名が「通り道」となっています。その後、昭和五十九年の第二十八号から文集名が変わり、「かみなが『い』」となり、平成六年には現在の文集名「かみなが『え』」となっています。長い歴史がありますね。さて、本年度の作品を読みますと、生活文、読書感想文、日記、詩など、実に様々な文章があり、どれも読みごたえがありました。掲載された皆さんは、とても感性豊かで、表現力が素晴らしいと感じました。実は、日本には決められた文字数で自分の思いや考えを表現する俳句や短歌というものがあります。若山牧水短歌まつりで入賞した作品の中から二首を紹介します。

さあ来いと さけんでいるが 本心は ボールよ来るな 野球の守り

江藤 慶太(高鍋東小)

目を見つめ 話しかけてみると なんとなく 架かったような 心のかけ橋

藤島 幸子(三財小)

どちらも小学生の作品です。たった三十一文字なのに、作者の思いや考えが十分読み手に伝わってきますね。その理由は、伝えたい思いがしっかりと表現されているからです。この文集に掲載された皆さんの文章にも、何を伝えたいのか、がしっかりと書かれています。文章を書くときのポイントです。この文集が読んだ方々の心に届き、手本となることを願っています。では、ゆつくりとご鑑賞ください。なお、本年度も、コロナ対策のために、家庭内回覧ができなくなりまして。よって、掲載された六年生のみへ、冊子を配付します。他の御家庭へは、本校ホームページへの電子掲載をもって、回覧に代えさせていただきます。

令和四年一月十三日 上長飯小学校 校長 大迫 拓也

井ノ上正盛さん

報道番組「アフリカ 飢餓地帯」をみて

五年五組 井ノ上 正盛

ぼくは、この番組をみて、(実際このようなことがこの世におこっているのだろうか)とつたがいました。だれもがそう思うのではないのでしょうか。

畑の作物も不作で、今まで住んでいた土地をはなれていくようすをみて、ぼくは言葉で言い表せないほどつらい気持ちでした。しかし、ぼくたちよりもあのアフリカの人たちは、もっとつらいのではないのでしょうか。

ぼくたちが食べる一せん分の食料を、一ヶ月間の食料にするという。想像もつかないつらさがあることでしょう。いつだったか、ぼくの母が、

「日本にあまっているお米をわけてあげられんもんやろかね。」と話して聞かせてくれたことがありました。今になって、ほんとうにどうにかできないものかなと思いました。ぼくたちの国は、お米がたくさんとれすぎて、農家では休耕田をして国からお金をもらっているそうです。この休耕田をアフリカの人達のために少しでも生かせないものかとぼくは思いました。

このような苦しみの中にある人々を見ると、ぼくたち日本人は、あまりにもぜいたくすぎるのではないのでしょうか。もし、ぼくたちがあのような食料ききにせまられたらどうでしょう。たった一つぶの米でも大切にするでしょう。たった一てぎの水でもたいせつにするでしょう。

ぼくたち日本人は、これらのことを十分に理解して生活していかなくてはいいけないと思います。それと同時に、このようなうえに苦しむ人々に少しでも、できることをしていかなくてはいいけないとぼくは思いました。

人の国のことを思っているても、それがいつかぼくたちの身にもせまってくるような気がしました。

昭和五十九年発行 第三十四号 「かみながい」収録。
本校卒業生の井ノ上正盛さん、小学五年生時の作文。

正盛さんは、この作文を書いた頃から、世界平和のために働きたいという夢をもっていました。大学を卒業した正盛さんは、夢をかなえ、世界平和のために、イラクという国で、外交官として仕事をしていました。ところが、平成十五年、突然、何者かに襲撃され、三十歳の若さで殉職されたのです。

私たちは、「井ノ上様」を校庭に植え、正盛さんの功績を忘れないために、毎年、正盛さんのお話を語り継ぎ、世界平和を願う集会を開催しています。